

# Management Club Report

Feb.2003 / Vol.2

## Monthly Opinion

## クライアントのストック

先ごろ、ある県の歯科医師会で医療管理講習会の講師として呼ばれた時のことです。担当の先生方との歓談のなかで、4月からの3割負担導入のことが話題となり、こんな体験談が紹介されました。

役員の先生方が揃って街頭に立ち、「医療保険3割負担反対」と染め抜いた深紅のタスキをかけて道行く人にビラを配っては訴えていたそうです。反応は芳しいものではなかったようで、特に、ひとりの中年男性からかけられた一言には愕然とし、考え方を改める必要性を痛感したそうです。

「おたくら共産党の人ですか？私は最近リストラにあって国保になったから既に3割負担です。関心ありませんよ」

なんだか負担率の上昇分を現実に被る受診者の人たちよりも、医療者だけがしゃかりきになっているようで虚しさを感じたそうですが、それと同時に医療保険改正はもっと違った観点から自分の経営に落とし込んで考えるべきだと思ったと、しみじみ述べておられました。

### 健康保険ベッタリからの脱皮

参考までにご紹介したこの歯科医師会は、会を挙げて保健衛生の強化に取り組んでおり、1歯科医院当りの歯科衛生士従事者が平均1.9人という高い数値を誇っている会で、件の先生の言葉には落胆よりもむしろ「これを機に健康保険ベッタリの姿勢から脱しよう」という新しい方向への意欲が感じられて頼もしく思ったものです。

当クラブの会員の皆様には本当に豊かな歯科医院経営者になって頂きたいと思います。そのためにはこれからの歯科医療あるいは歯科医院経営の方向を見誤らないでほしいのです。前段の歯科医師会の先生の話ではありませんが、この4月からの3割負担導入を機に、経営方針の基調を「健康保険ベッタリの姿勢からの脱皮」に置いてみるようにしてください。

健康保健からの脱皮というと、すぐに「高額治療の勧め」と思い勝ちですが、特にそういうことを強調しようというわけではありません。これまでの一般的な認識としては、歯科治療は「患者負担の少ない保険診療」と「高額な自由診療」とに区分され、保険診療は大多数を占める中低所得者、自由診療は一部の高所得者のものとされてきました。それゆえ一般市民の感情としては、「保健主体の良心的な歯科医院」「自由診療を勧める儲け主義の歯科医院」というような単純な色分けをしてきたのですが、「特別の高額治療ではない自由診療」にまで